

稲垣良典先生の死を悼む

片山 寛

稲垣良典先生が1月15日に亡くなられて以来、私の心にはぽっかりと穴が空いたようで、今でもそれを埋めることができないでいる。先生は昨年9月ごろから食欲を失われて、ほとんど何も口にされなくなった。当然、急激に痩せていかれたのだが、不思議なことに苦痛を訴えられることはまったくなかった。ただどうしても食べられない、とそれだけであった。それでも先生を訪ねると、にこやかに私を迎えてくださり、思い出や様々な哲学的洞察を語られた。しかし11月からはそれもかなわなくなり、入院して点滴で栄養を補給されるようになられた。末期の胃癌が発見されたのはその時である。新型コロナのために、それからは御家族でも短時間しかお会いできなくなり、それが私の先生との地上でのお別れとなってしまった。しかし安らかな最期であったとうかがっている。

稲垣先生が亡くなられたということは、私にとってはこの世界から羅針盤が失われたような衝撃であった。私は長年、先生のお仕事をお手伝いするという仕方で、自分自身の研究生活を送ってきた。自分ひとりのテーマの仕事をするときにも、このテーマについて先生ならどうお考えになるだろうか、ということが私の中では常にあって、言うなれば先生との対話という仕方で私は仕事をしてきたのだと思う。その先生が天に召されて、私は途方に暮れている。これは、稲垣先生に強く依存してきた私だから特にそうなのかもしれないが、大きな意味ではすべての人にとって、先生の死は、世界の基準（羅針盤）がひとつ失われた、ということの意味するのではないだろうか。そう思われてならない。

稲垣先生のお仕事は、特に後半生（1975年以降）、トマス・アクィナスの『神学大全』を毎朝営々と翻訳することをひとつの柱にしていたと思うのだが、それと結びついた先生ご自身の哲学的思索が、それに劣らず重要であった。多くの著作をなさった先生だが、中でも哲学的な意味で重要なのは、次の三つであったと思う。『習慣の哲学』（1981年）、『抽象と直観』（1990年）、そして『神学的言語の研究』（2000年、いずれも創文社）である。

『習慣の哲学』は、トマスが諸徳や学知などを *habitus*（習慣）という名で呼んでいたことに発している。*habitus* は能力（可能態 *potentia*）と現実態の間にあつて、私たちが通常、個人の能力だと考えている技術知や学知、あるいは個人の有する徳などは、すべて習慣である。ここでは私たちの通常の習慣概念を変更する必要がある。「ふつう習慣は同じような動作のくりかえしを通じて形成されることから、同じような動作の単なる反復が習慣の原因であるかのように信じこまれているが、それは誤りである」と先生は言う。「むしろ同じような動作の反復は、習慣が形成されるのに必要な準備にすぎず、また習慣が根を下ろすのを妨げる反対勢力にうちかつという役割を果たすものであつて、ほんとうの意味での習慣の原因は主体の内部に求めなければならない。じっさいに、習慣は人間のように開かれた本性——人間は人間であると同時に人間にならなければならないような存在である、との意味で——を持つものにおいてのみ形成されることができるし、また欠くべからざるものでもある。したがつて、習慣形成の原動力は、人間を人間になることへと向かつて、つまりみずからの本性の実現へと向かつておし動かす原動力と同じものである。そうした力とは理性と意志であり、言いかえると自由の能力である。……こうして、習慣は行使された自由の軌跡であり、人間が自由な能力の行使を通じてみずから作りだす道である」（「道と自由」稲垣良典『恵みの時』創文社 1988年、8頁）。

稲垣先生のご生涯は、まさにこの言葉を実践したものであつたと思う。良き習慣としての哲学の形成に向かつて、先生は日々努力を続けられた。そしてそのことは、先生を「諸徳を備えた人」にもしたのであつて、実際、先生に接した人間は誰でも、先生の人格において諸徳が実現しているのを感じないではいられなかつたのである。

『抽象と直観』は、「中世後期認識理論の研究」という副題がつけられているが、そのとおり、中世後期に、特にオッカムのウィリアムによって認識理論が大きく変化して、それが近世・近代の、基本的には直観を基礎にすえた認識理論の原因となったことを論証した著作である。トマスにおける「抽象」abstractio という名で呼ばれる形而上学的認識は、それによって廃棄され、その結果、知性的靈魂がより究極的な認識へと開かれた構造を持つことも、以後は失われてしまった。それは私たちの世界が「ゆとり」（余暇、教養）を失って「情報の飽食と精神の飢餓」（『恵みの時』184頁）の中で漂っていることの原因ともなっている。

稲垣先生はこの『抽象と直観』の構想を、1980年ごろから持っておられたご様子であるが、それが本格的に形をとったのは、1984年から85年にかけて、米国のプリンストン高等研究所で研究滞在をなさったときだった、と伺ったことがある。

稲垣先生のお仕事は、九州大学文学部での20年間（1972-92）、毎年前期の講義では「経験論哲学の研究」と題して、ロックやバークリ、ヒュームなどイギリス経験論哲学からカント、さらにウィリアム・ジェイムズやデューイ、パースなどの哲学における「経験」の概念を探求して講義され（その概観は、『講義・経験主義と経験』知泉書館2008年で知ることができる）、後期はそれを承ける形で、トマスを始めとする中世哲学の研究を講じられた。それゆえ、『抽象と直観』の後、先生はこれを展開・延長して、中世末期から近代にかけての人間精神のありようの変化を俯瞰する研究に着手する可能性があったと思う。しかし先生は結果としては、トマスにおける形而上学あるいは神学の研究を完成させる方向にすすまれた。先に挙げた『神学的言語の研究』はその代表であるが、『^{ベルソナ}人格の哲学』（創文社2009年→講談社学術文庫2022年）、『在るものと本質について』（トマスのDe enteの訳と解説・知泉書館2012年）、『トマス・アクィナスの知恵』（知泉書館2015年）、『カトリック入門』（ちくま新書2016年）、『神とは何か』（講談社現代新書2019年）なども、この方向での著作である。

中世の神学や哲学を現代と比べると、その大きな特徴は、学問がその学者の修養や修道という「生き方」の問題と切り離せないということだと思ふ。現代思想においては、その両者が分離してしまっていることが

多い。研究者は大学に勤める教員であることがほとんどで、いずれにしても修士というわけではない。大学における業務のかたわらで、時間を何とか捻出して書物をひもといているに過ぎないのである。とりわけ最近ではコンピュータの導入によって、書物を読むということの意味そのものが変化してきていると思う。修養のために、そして「徳の形成」のために書物を読んで役立てるといふより、書物の中の情報をいかに有効に能率よく処理するかが問われる時代なのである。

稲垣先生の存在は、そのような時代にあって、人間が学問をするということの喜びと意味を教えてくれるものであった。「真理はあなたがたを自由にする」(ヨハネ 8 章 32 節)という言葉は先生はお好きで、その著作の各所で引用しておられるのだが、先生を見ていると、確かにそれは本当だということを、私たちも実感することができたのである。